

稽古事遍歴

我が家の御近所に花柳舞、朱蝠さんという花柳流の舞踊家が住んでいらつした。ご主人は鴨物の梅屋金太郎氏で、その娘さんの要子さんと

私の履歴書

枝え

弓ゆみ

岩いほ

平ひら

①

は小学校の同級生であった。寿朱蝠先生は市川猿翁丈の妹に当り、踊りはすばらしかったが稽古は相当にきびしかった。日本の芸能の礼儀作法、舞台上立つ者の心がけなど、人生の機微にも通ずる氣働きを教えられたのもこの時代である。日本舞踊が上達したい

江戸の粹みせた鯉三郎

日舞、西川流まで2回の挫折

ばかりに長唄や三味線を習い、謡や仕舞にまで稽古が広がった。あまりに手を広げすぎたのと大学三年から母の知人である美容整形の院長夫人に頼まれて、患者さんの問合に返事を書いたり、広告文を書くのを手伝ったりする中に、到底、時間が足りなくなつてまたしても挫折した。三度目の正直は知人に誘われ

れて二世西川鯉三郎さんの踊りを観に出かけて、むらむらとその氣になつて今度は西川流に鞍替えをした。年齢的にも落ちついていて、下地もそれなりに出来ていたので、真面目に稽古に通い、昭和三十四年の春、なんとか苗字内に加えて頂いて、西川京の名前を頂いた。が、この年は私の生涯で最も大きな転機が訪れた。同年七月に全く思いも

よらなかつた直木賞を頂き、もはやのつぎならなくなつてひたすらもの書きへの坡道を歩きはじめることになる。生来、不器用な人間に臨見をする余裕はなく、遂に長年の稽古事遍歴には終止符を打たざるを得なくなつた。自分は稽古事から遠ざかつたが、今度は娘が西川左近さんの弟子になつてお師匠さんも

親子二代、弟子のほうも親子がお世話になると、いよいよ西川流と縁が深くなり、今では左近さんのファンになつてその舞台に感動させられている。西川流の苗字内になつたのと直木賞受賞が同年というのは偶然だが、文学の恩師である長谷川伸先生は六代目尾上菊五郎と親交があつて六代目の弟子であつた西川鯉三郎さんをよく御存知であつた。六代目の勧めで歌舞伎役者から舞踊家へ転じたことを喜んでいらして、あの人は踊つて名人、創つて天才だとおっしゃつていた。創つてとは勿論、新作舞踊のことで、折柄、日本舞踊界は新作ブームであつたが、今日まで踊り継がれて



学ん 提 供
能 秋 提 供
統 文 提 供
伝 文 提 供
な た 提 供
様 々 提 供

る。それにして、西川鯉三郎さんは女形の舞踊を得意となさつていたし、その芸風を見事に継

承した左近さんは女性舞踊家である。ご先祖が將軍様のお乳の人というのはなんとなく、符節が合ったようであらう。野暮な山の手育ちの私に江戸の粹を目のあたりに見せて下さつたのが鯉三郎先生で、その恩恵は私の作品にも人生にも及んでいる。

(作家)